

アトモスフィア

進歩する社会としない社会：
研究支援のあり方

倉地 幸徳*

私事に亘るが、私は35年前にポストドクトラルフェローとして渡米して以来米国大学で研究と教育に携わって来た。政府の招聘を受け3年前に本格的に帰国したが、まさに浦島太郎の心境で現実に揉まれて来た。文化・社会価値観の異なる社会での長い経験は、改めて我が国社会の諸課題を考える上で貴重な思考基盤を与えてくれると思う。この小文では我が国の研究予算システムについて考察する。

帰国後早速研究補助金など、研究予算への応募を開始したが、まず驚いたのは多くの研究予算に重点領域が設定され統括者が指名されている点である。メリハリをつけた研究費配分を行うためであろうかと想像する。しかしこれでは既存の研究分野・概念に捕われ易くなり、サイエンスメリットを審査基準とし独創性溢れるグラウンドゼロからの研究の支援を担保する事は難しい事になる。研究計画提案書は米国 NIH のものに比べると拍子抜けするほど簡単であるのは良いのだが、何故だか年齢記載欄が必ずある。退職年齢との関連からか60歳過ぎると極端に研究費が取り難くなるとも聞くが、能力と研究施設、環境が十分備わっている場合には知名度などによる事無く、誰でも研究の良し悪しによる公平な審査が与えられるべきであろう。又、我が国の代表的研究支援予算である科研費の審査基準と過程はどうにも不透明で、審査結果はわずかに、二行、“この分野に当てはまりません”や内容不明な批評とスコアと共に申請者に戻ってくる。これでは審査過程で研究提案のどこが不都合で何が優れていると判断されたのかさっぱり分からず、申請者は進化のしようも無い。結局、本質的な研究内容の良し悪し、研究メリットが審査の主基準では無く、人的ネットワークなど、副次的要素が重要な判断基準となっている審査システムのようなのだ。これでは研究の健全な進歩・発展を推進できるものではない。私は NIH のグラント審査委員として長い経験を持つが、NIH の場合、研究計画提案書もその審査も可能な限り徹底したものであり、最終的に審査委員が一堂に会し、提案研究の独創性・創造性を含め研究メリットに関して真摯な論議を行う。重要な点は、採択・非採択如何に関らず数ページに亘る詳しい審査批評の纏めが申請者に戻される事である。つまり審査結果如何にかかわらず研究・科学の進歩を強く促すシステムであり、優れた研究支援のための審査基準と研究育成の意図が明快である。これは価値観・文化の異なった社会にあっても見習うべき普遍的価値を持つ制度の一つであると思う。上記した事とも関連するが、我が国ではいまだに欧米で研究進展が見られ重要性が既に認められた研究分野・課題には大きな研究費が投入され、一方未知の世界を切り拓く独創的研究、新規分野の開拓、“only one”研究挑戦には研究費が極めて付き難い傾向があると聞く。研究予算配分が研究分野や研究者の認知度、流行キーワード、国内研究費の獲得歴、年齢制限、等に大きく影響される制度では多くの貴重な独創的研究の芽を潰す事になる。原理既知の大規模研究や改良型研究は比較的容易であり、それなりに価値はあるが、経済産業競争が激化する国際環境の中で我が国科学技術の将来発展を担保していくためには新分野開拓をも目指す真の独創的研究を含め、研究メリットに審査基準をしっかりと置く審査制度、明快な審査コンセンサスと倫理観を持つ審査委員の育成など、審査システムの改革を避けて通れるものではない。進歩を促さないいわば無利子/単利計算的研究投資ではなく、強力に進歩を促す複利計算研究投資に変換すべき時はとっくに来ている。大学や研究所の独法化改革と平行して研究支援システムの抜本的改革を行う事は科学技術立国日本にとって極めて重要で愁眉の課題ではないだろうか。

*(独)産業技術総合研究所年齢軸生命工学研究センター センター長